

9月から血栓形成予防効果のある合成高分子でコーティングされたカテーテルを導入した。2017年10月から輸液中へのヘパリン添加を中止した。コーティングの有無、ヘパリン添加の有無によるカテーテルの閉塞率を比較検討した。

## 6 当院でGH治療を施行したSGA性低身長についての検討

山崎 肇・永山 善久・大石 昌典  
佐藤 尚・臼田 東平・阿部 忠朗  
新潟市民病院総合周産期母子医療センター  
新生児内科

対象は20名(2002年2月～2014年9月出生、男13名、女7名、NICU入院歴あり13名、なし7名)のSGA (small for gestational age) 性低身長児である。NICU非入院の7名は正期産SGAであり、6名は出生時に診断されなかった。多くは安全にGH (growth hormone) 治療が施行され、成長率も改善したが、NICU入院例では神経学的予後が懸念される症例が多かった。

## 7 早産期における胎内発育遅延の発達への影響

林 雅子・桑原 春洋・楡井 淳  
星名 潤・庄司 圭介・金子 孝之  
新潟大学医歯学総合病院  
総合周産期母子医療センター

【目的】子宮内発育遅延の発達への影響について検討。

【方法】35週以下で出生した児に、修正18ヶ月、36ヶ月、にBayley IIIを施行し、SGA群、非SGA群で比較した。

【対象】修正18ヶ月122名、修正36ヶ月80名。

【結果】認知、運動、社会情動、適応行動では有意差を認めなかった。言語スコアでは18ヶ月で有意差はなかったが、36ヶ月ではSGA群で有意に低値であった。

【結論】子宮内発育遅延の影響も考慮した経時的な発達の評価が必要である。

## 8 新潟県における2017-2018シーズンRSV感染症入院数調査

臼田 東平<sup>1)</sup>・岡部 忠朗<sup>1)</sup>・山崎 肇<sup>1)</sup>  
佐藤 尚<sup>1)</sup>・大石 昌典<sup>1)</sup>・永山 善久<sup>1)</sup>  
榊原 清一<sup>2)</sup>、松永 雅道<sup>2)</sup>・田中 岳<sup>3)</sup>  
小林 玲<sup>4)</sup>・沼田 修<sup>4)</sup>・竹内 一夫<sup>5)</sup>  
倉辻 言<sup>6)</sup>・和田 雅樹<sup>7)</sup>

新潟市民病院総合周産期母子医療センター  
新生児内科<sup>1)</sup>

新発田病院小児科<sup>2)</sup>

済生会新潟第二病院小児科<sup>3)</sup>

長岡赤十字病院小児科<sup>4)</sup>

長岡中央総合病院小児科<sup>5)</sup>

県立中央病院小児科<sup>6)</sup>

魚沼基幹病院小児科<sup>7)</sup>

RSウイルス感染症は、乳幼児の最も頻度の高い呼吸器感染症であり、重症化しやすいハイリスク児にはモノクローナル抗体のパリビズマブによる予防が流行期に行われている。従来は冬期とされていた流行期が近年早まっていることが報告され、パリビズマブ投与期間と流行期にずれが生じている。新潟県における2017-2018シーズンのRSV感染症流行状況や入院数について調査した。

## 9 胎児MRIにて腸捻転を指摘された胎便性腹膜炎の1例

合田 陽祐・奥山 直樹\*・村田 大樹\*  
倉辻 言\*\*

県立中央病院研修医

同 小児外科\*

同 小児科\*\*

症例は0生日女児。在胎35週6日に健診時のエコーで軀幹断面積の増大が認められ当院産婦人科へ母体搬送となった。胎児MRIで多量の腹水、腸管拡張、腸捻転を指摘され、胎便性腹膜炎と診断された。翌日緊急帝王切開により出生、BW 3698gであった。同日、捻転解除、壊死腸管の切除、ストーマ造設術を施行した。術後5日目から経口哺乳を開始し、術後42日目でストーマ閉鎖術を施行し、術後110日目で退院とした。